



MONGOLIA

学校名: 千葉市立更科小学校

氏名: 中畑 翼

[担当教科: 小学校 4年生担任]

- 実践教科等: 社会科
- 時間数 : 6時間
- 対象児童 : 4年生
- 対象人数 : 8人

1 単元名

ごみ削減プロジェクト 2016 IN 更科

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ① 日本のごみ問題からどのようにすれば、ごみを減らすことができるのかを考えることができる。
(批判的に考える力)
- ② 日本のごみ問題からごみを減らす為にできることを考え、行動することができる。
(未来像を予測して計画を立てる力)
- ③ ごみ問題から日本とモンゴルの関係性(つながり)を理解することができる。
(多面的・総合的に考える力)
- ④ 自分の考えたごみを減らす工夫を発表することができる。(コミュニケーションを行う力)
- ⑤ 自分の考えたごみを減らす工夫をお互いに発表し合い、共感し合うことができる。
(他者と協力する態度)
- ⑥ 日本とモンゴルのごみ捨てについての共通点・相違点について考えることができる。
(つながりを尊重する態度)
- ⑦ 自分たちはごみを減らす為に、何ができるのかを考えることができる。(進んで参加する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る

日本のごみ問題からリサイクルへの意識への高まり等からごみが減っていることから、モンゴルへの JICA の支援によって確立しつつあるごみ収集のシステムがあることから日本とのつながりを感じることができる。しかし、日本ではごみ収集は、システム化されており、導入時には減少傾向があったが、今は、横ばいになっているという事実と出会い、どのようにしたらごみを減らすことができるのかを考え、実際に行動するという体験的な活動を入れる授業展開を行う。

2 子供の多様な考えを引き出す

モンゴルの最終処分場(ナランゲル最終処分場)の写真を使い、フォトランゲージを行う。児童の気が付いたことを自由に書き込むことによって、児童の気付きを引き出すことができる。単元最終に行うごみを減らす為にできることを考え、お互いの考えを聞き合うことによって、多様な考えを受け入れることができるような授業展開を行う。

3 考えを深めるために対話のある活動を導入する

手立てとして、フォトランゲージや自分のごみ削減策を発表する機会を作る。社会科では、日本のごみ問題について学びを深めており、それぞれがごみを減らす為にできることを考えることができるのではないかと考える。しかし、それぞれが考えたものを共有することによって、児童の多様な見方・考え方の獲得につながるのではないかと考える。

4 考えるための教材を見極めて提供する

本実践を社会科で授業実践を行う。他の教科・単元でも言えることであるが、教材は授業の命であると考え。児童に自分がごみを減らす為にできることを考えるというゴールの為に、その前の授業展開でどのような資料が必要なのか、策を考えるだけであれば、社会科のごみ問題の単元

のみで授業実践を行えば良いが、今回は、研修先(モンゴル)の事例との比較を行うことによって、児童に新たな世界観・価値観等があることにも触れさせたいと願っている。その為には、フォトラングージに使う写真等の教材の選択にこだわりを持って、授業実践をしていきたい。

5 すべ・手立ては活動に埋め込む等工夫する

授業の中で話し合いを取り入れるのはもちろんであるが、本研修で学んだフォトラングージを授業実践に積極的に取り入れていこうと考える。日本とモンゴルの最終処分場から感じたことや考えたことを書き込むという活動を取り入れることによって、児童がお互いの考え方の違い等に触れることができ、多様なものの見方・考え方を獲得させたいと思う。他には、児童の興味・関心を高めることによって、主体的な学びへとつながるように活動を仕組んでいきたい。

6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

児童の学びを振り返る機会としては、1、自分の書いたワークシートを見返す。2、フォトラングージに書き込みながら他の児童の考え方等を知り、書き終えた写真を見る。3、ごみを減らす為に、自分のできることを交流した後に、学習の感想や考えたこと等を振り返る場面である。活動をやりっ放しにしてはいけないと考えるので、意図的に振り返りの場면을授業の中に組み込んでいく。その中で、児童自身が自己変容を捉える機会となるであろう。しかし、「今日の授業で分かったことを書きましよう。」等と、曖昧な指示を出すと児童は何を書き手良いのかが分からない状態になってしまう。「今日は、初めて分かったことを書いてみましょう。」等と何を書くのか(視点)を与えるようにすることも学びを深める手立ての一つである。

7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

お互いの考えを認め合い学び合う文化(つながり)が大切であると考え。このつながりは、すぐにできるものではない、教師と児童のつながりは、本校は単学級のためクラス替えはないが、担任としては、四月から児童と関わっている。授業場面以外にもつながりを意識して授業実践に取り組んでいる。その例として、振り返りノートである。一週間頑張ったことや次の週のめあてや今の悩み等を書いている。普段の様子から児童の変化等を見取ることができるが、教師からのコメントを書くことによって、書いたことへの価値づけ等を行うことによって、「あなたのことを見ているよ。」というメッセージを送ることもつながる。児童同士のつながりも大切である。そのつながりができていないと、話し合い等で自分の意見を積極的に発表などができなくなる。そのようなつながりを大切にして、授業実践も行っていきたい。

4 単元の指導について

(1)教材観

ごみ問題については、社会科での学習ですでに学習を行っており、清掃工場の見学やごみ分別スクール等を経験しており、ごみを減らさないといけないという意識をもっている。モンゴルについては、最初は、どこにある国なのか、どんな国なのか分からない様子であったが、夏休み明け等に教師海外研修の話をするとう興味を持つようになった。海外について遠いイメージを持っている児童が多く、日本との比較を通して、親しみをもちたいと願っている。そこで上述の社会科の学習に関連させて、授業を行うことにした。生活していく上で必ずごみは出てしまうことから、自分たちの生活をよりよくしようという願いを持たせ、教材と関わらせていきたい。

(2)児童生徒観

本学級の児童は、何事にも意欲的に取り組める児童が多く、活発な話し合いを行うことができ、学習への意欲が高い。社会科の学習に対しても、興味・関心が高い。上述の実態から、児童の疑問や驚き、感動等の気持ちを持たせるような場を設定や適切な資料・教具を用いて、興味・関心をつなげていき、より深い学習につながっていくと考える。海外については、どこか遠いイメージを持っている。社会科の授業においては、地図帳等を活用しながら、様々な国に触れながら、学習を行っている。海外に行ってみたい等のあこがれを持っており、写真を見せて話をするとう興味を持ち、話を聞いている。自分たちの問題(ローカルな問題)と国際的な問題(グローバルな問題)をつなげて、グローバルな問題として捉えさせていきたい。

(3)指導観

日本とモンゴルの比較を行う上で大切にしていきたいことは、どちらが良いという判断をしないように

指導を行っていきたいと考える。日本とモンゴルの双方に、社会背景や人々のこれまでの営みが存在することや、これから児童が生きていく社会は、様々な人々との共生が必要となっていくからである。社会科においては、多様な見方・考え方の育成が必要となってくるため、自分自身も意識をして実践を行っていきたい。児童が主体的に学習を進められるようにしなければ、受け身の学習になってしまい、ごみを減らす為に、自分たちは何をすれば良いのか等の行動目標につながっていかない。本単元でごみ問題について学び、具体的な行動目標につなげていきたい。

5 評価規準

観点	学習方法に関する事	自分自身に関する事	他者や社会に関する事
評価規準	・モンゴルや日本のごみ捨てに関して興味を持ち、共通点・相違点を考えることができる。 ・進んで気付いたことをワークシート等へ書き込むことができる。 ・分かったことを工夫して表現をすることができる。	・ごみ問題を自分たちの問題として捉え、自分たちには何ができるのかを考えることができる。 ・ごみ問題に対して、自分なりの思いを表現することができる。	・他の児童とともに、日本とモンゴルの共通点・相違点を考えることができる。 ・ごみを減らす為の工夫を他の児童に分かりやすく伝えることができる。
評価方法	・ワークシート ・発言	・ワークシート ・発言	・ワークシート ・発言

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルについて知ろう。	モンゴルについて興味・関心を持つ。	クイズやスライドを通して、モンゴルについて理解を深める。
2	モンゴルの生活について知ろう。	モンゴルの生活について興味・関心を持つ。	クイズやスライドを通して、モンゴルの生活について理解を深める。
3	モンゴルのごみ問題について知ろう。(本時)	モンゴルのごみ問題について興味・関心を持つ。	クイズやスライド、動画を通して、モンゴルのごみ問題について理解を深める。
4	日本のごみ問題について知ろう。	日本のごみの処分方法や最終処分の仕方について理解を深める。	清掃工場の復習や最終処分場の写真を見て、日本の処分の仕方について理解を深める。
5	モンゴルと日本のごみ問題について比較しよう。	モンゴルと日本のごみ問題についての比較を行う。	モンゴルと日本のごみ問題の学習を生かして、二国間で比較を行い、共通点・相違点を考える。
6	ごみをへらす為に自分たちのできることを考えよう。	自分たちがごみを減らす為にできることを考える。	今までの学習をふり返り、自分たちには何ができるのかを考える。

7 授業事例の紹介

単元名【 ごみ削減プロジェクト 2016 IN 更科 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月25日(金)5校時 (13:35～14:20)

(イ)実施会場 4年生教室

(ウ)本時の目標

・モンゴルのごみ問題に関心を持ち、資料などから意欲的に調べたり考えたりする。(関心・意欲・

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

態度)

・日本の支援技術協力やモンゴルの現状からモンゴルのごみ問題を考える。(思考・判断・表現)

(エ)指導のポイント

・モンゴルのごみ問題の現状をフォトランゲージで児童の考えたことや思ったことをたくさん書き出すことによって捉え、日本が行ったごみ収集の支援がモンゴル社会に生かされていることをおさえる。

・今までの学習と関連させて、モンゴルのごみ問題の特徴を捉えさせる。

(オ)本時の展開

過程・	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評
導入 5分	1 前時までの復習を行う	前時までのスライドをまとめたものを見て、モンゴルについて振り返る。	一斉	教室横にスライドをまとめたものを掲示	
展開 35分	2 学習問題の提示	モンゴルは、どのようにごみ収集や処分を行っているのだろうか。			
まとめ 5分	3 動画を見せる	・モンゴルのごみ収集についての動画を見て、分かったことや考えたことをワークシートに書き込む。	個別 一斉	動画をテレビに映す。 ワークシート	動画から分かったことをワークシートに書くことができる。
	4 児童の意見をまとめ、板書をする。	・ワークシートに書き込んだことを発表する。			
	5 フォトランゲージの説明を行い、児童に思ったことや考えたことを書き込ませ、発表させる。	・フォトランゲージを行う。 ・わかったことを発表(交流)する。		ナランゲル最終処分場の写真を拡大し、フォトランゲージを行えるようにする。 用紙:模造紙で作成	写真から分かったことを書き込むことができる。
	6 本時のまとめと感想を発表させる。次回の予告を行う。	・ワークシートにまとめと感想を書き込む。 ・感想やまとめを発表する。		ワークシート	

(2)授業の振り返り

【良かった点】

・同じアジアにあるモンゴルという国(日本との関係性等)を理解することができた。
・日本のモンゴルへの支援によって、ごみ収集の文化がモンゴルに根付き始めていることや日本とは異なるごみの最終処分の仕方があることを知ることができた。

- ・学習内容を生かし、発展させながら考えることで話し合いを深めることができた。
- ・全員が自分の意見を持ち、積極的に意見を言うことができた。
- ・自分たちの考えたごみ減らす為の方法を実践し、学んだことを自分たちの生活につなげることができた。

【改善点と具体的な改善策】

- ・動画の画質が悪く、モンゴルのごみ収集の様子が分かりにくかった為、次時に再度児童に見せ直しを行った。

(3) 使用教材



写真1 フォトランゲージ用いた写真

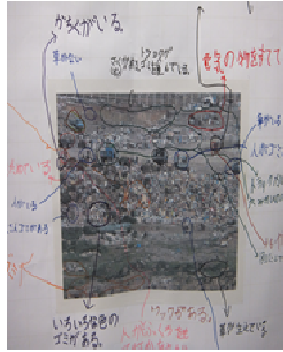


写真2 フォトランゲージ



写真3 モンゴル スライド

(4) 参考資料等

- ・ESD 環境省 学びをつなぐ未来をつくる

www.p-esd.go.jp/topics.html (閲覧日: 2016. 11. 11)

- ・評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 社会)

www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/.../02_sho_shakai.pdf (閲覧日: 2016. 11. 11)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化 (児童の感想より 一部抜粋)

- ・モンゴルという国は、授業をやる前は知りませんでしたが、人よりも動物(家畜)が多い国ということが分かりました。日本で当たり前のように行われているごみ収集が当たり前ではないことや、日本の技術をモンゴルに伝えたことが分かりました。
- ・モンゴルに行ってみたいなと思いました。相撲の力士さんにモンゴルの人がたくさんいることは、今まで知りませんでした。先生がモンゴルの写真を見せてくれた時の料理(ホウショール)がとても美味しそうだなと思いました。羊の肉が入っていると聞いて、どんな味なのかとても気になりました。日本以外の文化が知れて、良かったです。
- ・モンゴルの最終処分場に人や動物(家畜)がいて、とても驚きました。最初は、日本と同じように燃やして処分をしているのかなと思っていたけど、そのまま埋めていることが分かりました。ごみから出た汁とかでにおいや土が汚くなったりしないのかなと疑問に思いました。他の国では、どのようなごみの処分方法をしているのかを調べてみたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 本単元におけるPDCAサイクル

P 計画

- ・単元の目標や授業のねらいを設定した。
- ・学習指導計画を作成した。
- ・授業の準備として、モンゴルの基本情報、日本とモンゴルのごみ問題の情報を収集した。

D 実施

- ・ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材に授業を実施した。
- ・フォトランゲージで写真から気が付いたことや考えたことを記入させた。
- ・ワークシートに考えを記入させた。

C 検証 ・ワークシートや授業中の発言をもとに評価を行う。
【成果】 ・モンゴルの国について理解を深めることができた。 ・日本とモンゴルのごみ問題を比較し、ごみを減らす為に何ができるのかを、グローバルな視点からローカルな視点とをつなげて考えることができた。
【課題】 ・授業中に見せた動画の音が出ないなどの機会トラブルがあり、スムーズな授業実践が行えなかった。
A 改善 ・動画の確認などを徹底して行う。 ・児童の学びをまとめ、学び(単元全体)のフィードバックを行う。 ・指導案の改良を行う。

10 教師海外研修に参加して

自分自身が小学校時代に国語で学んだ「スーホの白い馬」の世界であるモンゴルに訪れることができ、貴重な体験・経験をすることができ~~た。ました。~~研修前のモンゴルのイメージは、草原にいる遊牧民族や元寇など日本と戦ったというイメージしかなかったが、研修後は、とても日本と深く関係している(つながり)を理解することができ~~ました。~~モンゴルには、日本からの支援によってできた学校(写真4)・橋・ごみ収集の仕組みなど様々なものやことがモンゴル文化になじんでいることも同時に理解することができ~~ました。~~モンゴルの青空(モンゴリアンブルー)がとても印象的で~~あった。~~(写真5)心が洗われたように思~~った。~~日本から遠く離れた地で活躍している人々(青年海外協力隊員の皆様)が目をは輝かしている姿を見て、あこがれを抱~~き。~~

授業実践を通じて、つながりを意識していき~~ました。~~今まで国際理解教育・開発教育に取り組んでいたつもりであったが、それは、自分が海外旅行に行った先について話をするなど、児童にとっては、「そうなんだ。」と、あまり興味や関心が持てるような内容じゃなかったのではないかし~~ん。~~今回は、国内やモンゴルでの研修を生かした授業内容になったのではないかし~~ん。~~良かった部分だけでは~~ない。~~反省点も多々あると思~~った。~~国際理解教育・開発教育を今回だけで終わらせることなく、来年度以降も継続して行っていき~~たい。~~やはり現場で感じる空気を体感しないと、教材の鮮度が違ってくることも今回学ぶことができ、本当の意味での学びにつながるなと思~~った。~~同時に、今回の研修でつながった群馬県・埼玉県・東京都・千葉県・長野県・新潟県の先生方とのネットワークを大切にしながら、実践していき~~たい。~~

海外で働きたいという気持ちを今まで持っており、それまでは、日本人学校への派遣以外の選択肢があることを知~~らなかつた。~~今回活動先にも伺~~った。~~自分も青年海外協力隊として海外に行きたいなという気持ちが芽生え~~ました。~~世界の現状を自分の目で見て、自分には何ができるのかを考え、行動することが求められ~~る。~~しかし、日本に現場を持つ教師として青年海外協力隊に参加する以上は、日本と派遣国をつなぐ架け橋になれば良いなと思~~った。~~



写真4 日本のODAで建設をした学校

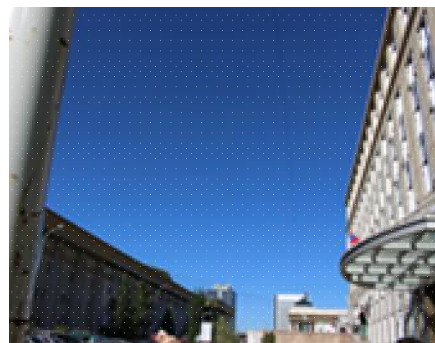


写真5 モンゴルの青空